

監修

新村出
山岸德平

高木市之助
小島吉雄

久松潜一

土佐日記

萩谷 朴校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

萩谷 朴（はぎたにぼく）

大正六年大阪府生。昭和十五年東京大學國文學科卒業。二松學舍大學教授。主著―土佐日記新釋、平安朝歌合大成、平中全講、古典大系・歌合集等。

日本古典全書

「土佐日記」 萩谷朴校註

昭和二十五年五月十五月初版發行

昭和四十二年四月十日第十一版發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉區砂津・名古屋市

中區榮）

定價 四四〇圓

目次

解 說

一 寛平以後の時代の様相	三	九 貫之の他の作品	三三
二 土佐日記の成立	六	一〇 歌人としての貫之	四四
三 日記文學——土佐日記の形態	九	一一 貫之の功績	五一
四 紀行文學——土佐日記の素材	一四	一二 土佐日記の本文史	五三
五 戯曲の性格——土佐日記の構成	一八	一三 土佐日記本文の校訂	五五
六 歌論書——土佐日記の主題	二一	一四 土佐日記の研究書	六一
七 假名書き和文の普及——土佐日記の效用	二六	一五 土佐日記の現代的意義	六四
八 貫之の閑歴	二六		

凡 例

本 文

土佐日記	七一
古今和歌集序	一〇五
大井川行幸和歌序	一二三
新撰和歌序	一二五

天慶八年梁簡ノ銘……………一九

天慶二年二月二十九日紀貫之家歌合……………三三

三月三日紀師匠曲水宴序……………三七

自撰本貫之集……………三一

貫之全歌集……………三七

一 他撰本貫之集……………三七

第一 屏風歌の部……………三七

第二 同……………二五

第三 同……………一九

第四 同……………一九

第五 戀歌の部……………二三

第六 賀歌の部……………二七

第七 別歌の部……………三三

第八 哀傷歌の部……………四〇

第九 雜歌の部……………四四

二 自撰本貫之集による補遺……………六六

三 土佐日記による補遺……………六六

四 大井河行幸和歌による補遺……………六七

五 寬平御時后宮歌合による補遺……………六七

六 是貞親王家歌合による補遺……………七四

七 宇多院物名合による補遺……………七四

八 朱雀院女郎花合による補遺……………七五

九 延喜五年二月廿九日平定文家歌合による補遺……………七六

一〇 延喜十三年三月十三日亭子院歌合による補遺……………七六

一一 延喜十三年十月十三日內裏菊合による補遺……………七七

一二 古今集による補遺……………七七

一三 後撰集による補遺……………七八

一四 拾遺集による補遺……………八三

一五 新古今集による補遺……………八五

一六 續後撰集による補遺……………八六

一七 續古今集による補遺……………八六

一八 玉葉集による補遺……………八六

一九 新拾遺集による補遺……………八七

二〇 新後拾遺集による補遺……………八七

二一 紀師匠曲水宴和歌による補遺……………八八

土佐日記

—紀貫之全集—

萩谷

朴

解 說

一 寛平以後の時代の様相

外戚の地位によつて攝關政治の權を握るといふ事は平安時代を一貫した藤原氏の根本方針であつた。その藤原氏の攝關政治の基礎を確立した忠仁公良房の子、昭宣公基經は、皇位繼承といふ大事に關しては極めて公平無私であつた。どのやうな無理押しをしても自己の女系の親王でもつて皇位を繼承させねば満足しなくなつた後世の藤原氏の頭領達に比べると、陽成天皇の後に紀伊守藤原總繼の女澤子の御腹の光孝天皇を冊立し、光孝天皇の後に仲野親王の女班子女王の御腹の宇多天皇を立てた基經の處置は、人物本位の公平な立場に立つての正しいものであつたといはねばならない。

かうして、今から千年あまり昔、西紀八八七年、第五十九代の皇位を繼承された宇多天皇は、しかしながら彼基經が豫期してゐたより以上に英明な御方であつた。天皇が御即位の後、先づとり上げられた政治上の根本方針が、光孝天皇の御志を繼いで、藤原氏の攝關政治を抑へて、天皇親政の實を擧げることにあつたのは、誠に皮肉なことであつた。そこで天皇が、藤原氏に拮抗し得る人物として擧用されたのは、識

見才腕共に實力のある學者グループの人々であつた。まづ橘廣相、そして菅原道眞がこれである。有名な阿衡の議の紛糾の後、寛平二年十二月に、基經が表を奉つて關白の職を辭し、つづいて翌年正月に薨去して、ここに藤原氏の攝關政治に休止符がうたれ、一應、天皇親政の御理想が實現したものと見られるに至つた。

宇多天皇が道眞を登庸して行はれた數々の治績の中で、主な史的事象の一つは何と云つても遣唐使の廢止である。それより約二百三十年前、天智天皇の御代に大陸と我が國との國交が恢復してから、歷朝しばしば遣唐使を派遣して、唐の文化を吸収することに大いにつとめられたのであるが、この遣唐使もまた、航海術の幼稚なその時代であつたこととて、毎回相當な犠牲を出すのを常としてゐた。宇多天皇の寛平六年にもまた、この事が企てられて、菅原道眞を遣唐大使とし、紀長谷雄を副使として任命されたのであるが、その頃、唐は既に衰世に及んでゐて、必ずしも危険を犯してまで輸入するに値するほどの優れた文物もなかつた。そこで道眞は表を奉つて公の議決に懇へた後、遣唐使はいよいよ廢止されることとなつたのである。

天皇親政と文化諸般の日本的成長、この二つが寛平以後の日本にもたらされた政治上の著しい變革であるが、これはとりもなほさず一般文化の、そしてまた、特に文學に於けるこの時代の性格を規定するものであつた。文學は、個人の自由と創造とのやみがたい自己主張を内に藏してゐるにもかかはらず、社會的

存在としては絶対に政治に追隨するものである。上代の強力な中央集權國家に於ける文學的な修史事業は云ふまでもなく、更に原始的な部族社會時代に於ける長篇敘事詩もまた、すべては政治的な中心に對する讚美に奉仕するものに他ならなかつた。文學は時代に先行するといふよりも、政治に追隨するといふ方が、遺憾ながら常にある姿のやうである。寛平以後の國文學は、その故に、今述べた政治上の二つの大きな情勢の下に於いて發展していつたものであるといふ事を忘れてはならない。具體的に云ふならば、目覺ましい和歌の興隆と假名書き和文の發達とがそれであり、しかもそれらの國風の新興文學が、完全な皇室の御庇護の下にすくすくと充分な成長をとげたのであるといふ事が、この時代の特筆すべき文學的様相なのである。

和歌、特に短歌の普及、古今和歌集の編纂による和歌勅撰事業の創始、歌合・歌會等の宮廷的な集團文學行事の頻繁な催し、家々の個人的な歌集の編纂、古今集序や歌合判詞等に見る歌學思想の萌芽、伊勢物語・大和物語または諸家集の地の文に見る歌物語的な部分、歌合序として附せられた假名日記、そしてこの土佐日記、何れもが和歌を中心として獎勵せられ、またそれから派生した文學の様式である。傳奇小説としての竹取物語がわづかに異彩を放つてはゐるが、この時代の他のすべての文學作品が、和歌それ自體かまたは和歌からの延長分化に他ならないといふことは、前に述べたこの時代の政治的情勢と文化諸般の傾向とに照らし合はせて、見逃がすことのできない特色である。

二 土佐日記の成立

土佐日記が生まれた時代を大きく通観すると、前項に述べた通りであるが、土佐日記を生むに到つた直接の事情はどのやうなものであつたらうか。

土佐日記の作者紀貫之は、清和天皇の貞觀十年前後に生まれて、宇多天皇の御代に廿歳代の青年時代を過ごした人であると推定されるから、彼の素直な生真面目な性格と考へ合はせて、この時代の風潮を完全に身につけた、この時代を象徴したやうな人物であつたと考へられる。事實、彼の文學的な行爲と業績とは、全くこの時代の文學の水準器であり、生きた碑文であつた。醍醐天皇の延喜五年、古今集編纂の事業に加はつて事實上その主筆的地位に立つてから後、彼はこの天皇の御代を國文學界の指導者として時がましい道を常に歩んで行つた。その貫之が晩年、土佐守に任ぜられたのは、延長八年正月の事であつたが、彼はさうした國司に任ぜられて地方に下る際にも、天皇から新撰和歌の撰進を委嘱せられてゐた程に、この時代の文學の最高責任を背負つてゐたのである。謹直精勵な性格の貫之は、歌人・文學者としてだけでなく、有能な官吏としても決して公から輕んじられてはゐなかつたやうである。

ところが貫之の在任中、醍醐天皇は崩御あらせられ、次いで御即位になつた朱雀天皇は、御年僅かに八歳であつたので、御伯父藤原忠平が攝政となり、藤氏一門は父子兄弟相並んで政權を執ることとなつた

が、その爲に朝廷の紀綱も漸く弛んで來た。その結果、京畿には群盜出沒し、地方には海賊が跳梁するといつた治安の亂れた状態に立ち到つたのである。例の有名な純友の亂が貫之の在任中の承平四年に起り、さらに天慶二年には純友の再舉と將門の叛亂とが東西に時を同じくして起つた事を思へば、その頃の地方行政がどんなに困難であつたかがよくわかる事と思ふ。さうした海賊の蜂起する山陽・南海の方面にあつて、國司の地位にあつた貫之の苦心經營も並大抵の事ではなかつたであらう。ところが事態が重大であり、且つ土佐守としての貫之の治績が良好であつた爲であらうか、承平三年末に國司四年の任期が満了する筈であつたところを、さらに延任して、承平四年の十二月まで土佐に在國してゐたのである。この事を、日記中には「縣の四年五年果てて」といふ風に記してゐる。

承平四年十二月二十一日、いよいよ歸京する事となつた貫之は、國司の館のある土佐の國府を引き拂つて大津に移り、二十七日大津を出發して、海路を、室戸崎を迂回し、阿波の鳴門と紀淡海峡とを横斷し、大阪灣を浦づたひに、淀川の河口まで北上し、さらに淀川を溯航して、翌五年二月十一日山崎に到着し、十六日、漸く入洛歸邸するといふ運びとなつたのである。その間、土佐を去るに際しての知人交友との袂別の事情や、途中に觀賞した各地の風光とか、船中での出來事、または湊々での挿話などを備忘的に書きつけておいた日記を、歸京の後に、公務や私用が一段落ついて、少しばかり暇の出來た頃、旅の荷から取り出して、おもむろに構想を練り、これを假名書きの和文に改め、天候や海賊に對しての恐怖とか、土佐

でなくした女の兒への追憶など、種々の感想を幾つかの筋とし、終始の纏つた一篇の紀行文としたのであるが、さらに彼の抱いてゐた歌學上の理念と、作歌に際しての心得とを、一つ一つの歌に對する評言として加へたり、古歌を引用して説明するなど、懇切に、しかも自在な創作的手法でもつて日記中の各場面に織り込み、假名文の普及的意義とともに、當時の文藝に各種の新生面を拓くものとして、貫之がある意味での野心と、洒々落落とした微笑みでもつて書き綴つた啓蒙的な試みが、この作品となつたわけである。

勿論この作品は公に發表するといった性質のものではなかつたと思はれるが、或ひは内々いづれかの貴顯の求めに應じて、啓蒙的な興味本位の和歌手引きとして作られたものであるかも知れない。いづれにしても、單なる日記紀行ではなく、さらに別の意圖をもつた歌日記である事に留意して讀まねばならない。

なほ、この著作の草稿となつたところの舟中の日記は、恐らく當時の公家男子に常用せられてゐた具注曆に書き込まれたところの、漢文體のものであつたと想像される。

書名は土佐日記、トサニツキと讀むが、古くは土左日記と書き、トサノニキとよまれた。體裁は筆寫の卷子本一卷、作者は勿論前土佐守貫之。成立時期は朱雀天皇の承平五年（西紀九三五年）今からほぼ千年の昔である。この年、半島では新羅亡び、翌年、大陸では五代の後唐亡びて後晋立ち、半島では、百濟亡んで高麗が半島を統一し、遠く西歐では、後の神聖ローマ帝國の創立者ドイツ王オットウ一世が即位した時

である。

三 日記文學——土佐日記の形態

日記文學の本源は、やはり實用日記から出てゐると見なければならない。實用日記の本來の使命は、歴史的事實の忠實な記録である。これを「まほの日記」とよび、その形は漢文體を主とした。この實用日記を代表するものは、主として公家男子によつて記録された漢文日記であつて、それは具注曆の記事欄に記入され、卷子の表面に餘白のなくなつた時には、紙の裏面に「裏書」として加へたり、さらに詳細を要する時には、別の紙を用ゐて、所謂「別記」として記録しておくといふ方法によつた。この日記に使用せられる文字は漢字であり、文體は漢文で、その記事の内容は日々の公務を中心として、公私の出來事を記録するに終始するものであつた。

日記は連續的な日常の出來事を目次を逐つて記録して行く「日なみの記」としての性格が濃厚である。しかし日記の本質として、この目次の連續性は必ずしも不可缺ではない。その記録が、一日一日に獨立してゐてもよいし、何日か間の缺けた斷續するものであつてもよい。要するに日記の單元は、「その日の事書き」にあると考へられるのである。以上に述べたところは、その本質として實錄性を根本とする實用日記に就いてであつて、所謂「文學」としての日記作品についてではない。勿論、これ等實用日記であるとこ

るの漢文日記にも、時として、そこに筆録者の内省的又は感覺的な感想が幾分つけ加へられることもあれば、假名でもつて和歌などが記入されることも稀にはあつた。しかし、それはあくまでも部分的な例外に屬するものであつて、全體としては、これ等初期の漢文日記は、實錄性一つに執着してゐて、文藝性の認められるものはなかつた。この漢文日記に對して當然考へ合はせられるものは、公家女子のものとする假名の日記である。

この時代の女流の日記作品としては、延喜十三年亭子院歌合の伊勢の筆になるといふ假名日記であるとか、延喜廿一年京極御息所歌合の假名日記、醍醐皇后の太后御記、天徳四年三月卅日内裏歌合の假名日記などが今日我々の手に残されてゐる。太后御記はこの際論外におくとして、これ等の歌合の假名日記は、いづれも恐らく女流の手になつたものと考へられるが、これが假名文字の和文で書かれてゐるといふ點を除いては、ほぼ漢文日記と本質上差異のない實錄性に終始する「その日の事書き」であるといふことは注目されねばならない。勿論、文體が和文であるところに、漢文日記よりはより自由に思想を發表する事が出来るといふ特長が認められるし、筆者が女性である點に、衣服の色彩などについて、より繊細な感覺的な描寫がなされるといふやうな特異さは認められるが、本質的にはさしたる變化を認める事は出来ないやうである。

では、文藝としての日記文學とはどのやうなものであり、その特性はどのやうなところにあるか。實用

日記と文藝日記との區別は、單に漢文日記と假名日記といふやうな形骸的な點にその差異を指摘することは出来ないやうである。即ち蜻蛉日記とか更級日記とかのやうな後世の文藝としての日記作品に著しいところのものは、「まほの日記」としての實錄性の上に、更に色濃く自照的な抒情的な性格を滲み出させてゐることである。文學の本質より云ふと、これ等の作品には、日記としての實錄性よりも、却つて、抒情文學としての内省的な自照性が作品の中心を強く貫いてゐるやうである。女流假名日記において、この事は、抒情文學の端的な様式であるところの和歌を極めて多く含んでゐるといふ外面的な徴候となつて現はれて居り、この面において家集であるとか歌物語のやうな他の文學様式の分野と接近してゐることが認められるのである。

しかしながら、かうした文藝としての日記作品が、自照性を主調として、日記元來の本質であるところの實錄性を潜在的なものにしてしまつてゐるからといつて、この實錄性を全く無視して考へる事は許されない。描寫する對象が心理的なものから外縁的なものに移向するにつれて、自照性の幅は狭くなり、實錄性が再び表面にはつきりと現はれて來るものである。この事は紫式部日記において典型的に見られる現象であつて、要するに日記文學の本質は、實錄性と自照性との二元的なものと認むべきであり、その描かれる對象が、外面的であるか内面的であるかによつて、この二つの本質が互ひに補足的に消長してゐるものと考へられるのである。その點に於て、後世の藤原定家の明月記などが漢文の實用日記でありながら、多

分に文藝的な要素を含んでゐると認められるやうに、文學の本質よりいへば、それが漢文體であらうと和文であらうと係りはしないわけである。但し、國文學史上我々が日記文學として取り扱ふものは、實用日記の直接轉化であるところの歌合假名日記のやうなものから、蜻蛉・更級のやうな純文藝日記に到るまでの假名日記の系列にあるものを云ふのである。

ところでかうした觀點に立つて、貫之のものした假名の日記を見ると、日記文學としての土佐日記には、果して本質的にどのやうな性格を認定することが出来るであらうか。即ち、土佐日記は、假名文字の和文で書かれて居り、和歌を多く含むといふ點に、形體的には一應日記文學と認められるし、公務については殆ど紙面を與へてゐない事、海賊に對する恐怖とか、天候に關する憂慮、亡兒を憶ひやる哀戀の情、その他、各人の感想などの心理事象について多くの筆を費やしてゐる點に、既に實錄性のみに依據する實用日記の域を離れて、文藝日記の範疇にはいるもののやうにも思はれる。殊に全體の構想が、和歌を中心とする説話として纏つてゐる點に、歌物語との接近を示す文藝日記一般の性格と相似たものがあつて、この點に特に土佐日記が文藝としての日記文學の系列の先頭に立つといふ從來の考へ方が、ます／＼肯定的なものとなつて來るやうに思はれる。しかし、一方に於いて、日記の記事の進行の上に、非常に目次の曆算を正確にしてゐる事とか、毎日の氣象や旅程についても細大の義務的な記載を洩らしてゐない點、簡略な漢文直譯的な文章に終つてゐる日の多い事、いひかへると、そのやうに記載事項に乏しい日までを克明